ある朝、天使が舞い降りて

SatukiAon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある朝、天使が舞い降りて

【Ｎコード】

Ｎ２３９８Ｖ

【作者名】

ＳａｔｕｋｉＡｏｎ

【あらすじ】

目覚めると、妹の背中に翼が生えていた。そこへ予言の御子を迎えに来たという異世界人まで現れて――？

いわゆる普通のお兄ちゃんが、妹を守ろうとがんばる話。でも妹萌え要素とかないのでご注意ください。

【01】ある朝、天使が舞い降りて

その日の朝はけたたましい悲鳴からはじまった。

目覚まし時計が鳴り出す五分前。

寝起きに響いたその声に驚いて、啓孝（あきたか）は勢いでベッドから転がり落ちた。

「……っ」

発生源はすぐにわかった。

啓孝はむっすりと顔をしかめながら起き上がった。枕元の眼鏡を掴み取って装着。寝巻きのまま廊下へ出ると、右隣の部屋の前に立って軽くノックする。

返事はなかった。

もう一度ノックをして、今度は返事を待たずにドアを開けた。

「入るぞ」

中はまだ遮光カーテンがひかれたままで、薄暗かった。部屋は一目で見渡せる広さしかなく、ベッドの上が不自然に盛り上がっているのもすぐにわかった。どうやら部屋の主が、頭から布団をかぶって座り込んでいるらしい。

「なにやってるんだ、結美（ゆうみ）？」

声をかけると、びくっと大げさなくらい布団が震えた。それ以上の応えはなく、啓孝は窓に近寄りカーテンを開け放った。空は抜けるように青かった。昨夜の雨で隣近所の屋根や道路が湿っている。庭木の葉にもまだ名残の滴が残っていた。

啓孝はまぶしげに目を細めて、ベッドを振り返った。

「さっきの声はなんだったんだ？　どうせ変な夢でも見て寝ぼけたんだろうけど、きっと隣近所にも聞こえたぞ」

ため息をつきながら眼鏡のブリッジを押し上げる。すると、もぞ

もぞと小山が動いて結美がひょこっと顔をのぞかせた。
「あ、兄ぃ……」
妹はなぜか涙声だった。
「なんだよ……？」
そのときになって初めて啓孝は気がついた。結美のからだを覆う布団の膨らみが、明らかに大きいことに。首から下をきっちり覆い隠した布団は、背中側だけが変に山なりになっている。まるで二人羽織でもしているかのようだ。
そう考えて、啓孝の思考がふと逆回転し始めた。清々しい朝の静寂を切り裂いた悲痛な悲鳴、布団から出てこない妹と頬を濡らす涙の理由――。
ひとつひとつを反芻し、一瞬で弾きだされた答えに啓孝はわなないた。
「おま……結美！　その中にいるのは誰だ！　いつのまにそんな……っ」
結美はぽかんと啓孝を見返した。そしてすぐその意味を理解して、かっと頬を上気させた。
「や、そんわけないじゃん！　兄ぃのばか！　へんたい！」
さっきの涙はどこへいったのか、結美は前のめりになって抗議してきた。
「なに考えてんの、ほんとにもういやらしいな！」
「な……じゃあ、なんなんだよソレは！」
耳を赤くした啓孝がムキになって布団の膨らみを指差すと、結美はうっと言葉につまった。急にしおらしくなって、上目遣いに啓孝をうかがう。
「……お、驚かないでね？」
「は？」
「いいから、驚かないって約束して！」
「……わかった。約束するよ」
よくわからないまま渋々承諾すると、結美は決心したように大き

く息を吸い込みいっきに布団を剥ぎとった。

間近で鳥がはばたく音が聞こえて、視界が白いもので埋めつくされた。

妹の背中に隠されていたもの。

それは白い翼だった。鳥の羽のように羽毛で覆われた大きな翼に、窓から差し込む朝日が反射して光の粒が舞っている。頭の上に金の輪っかでもついていれば、絵に描いたような天使のできあがりだ。だが結美はちゃんと生きているし、少なくとも昨日の夜まではこんなものはついていなかった。

ベッドの上を占領するように広げられた二枚の翼は、両手を伸ばした幅よりも大きい。

結美は胸の前でもじもじと両手の指を絡ませながら口を尖らせた。

「うー。驚かないって言ったのに……」

「お、驚かないやつがいるか！」

我に返った啓孝が思わず怒鳴ると、結美のからだと一緒に背中の翼も縮こまった。

「……それ、背中から生えてるのか？」

啓孝は近くに寄って、そっと手を伸ばした。むかし飼っていた手乗りインコの羽よりも、ずっと大きくて柔らかい。だが触れた翼には温もりを感じなかった。

「う、うん。たぶん。でもね、パジャマはべつに破けたりしてないんだよ。生地を通り抜けてるみたいで……」

結美は身をよじって背中を覗き込もうとしたが、翼が邪魔だったのかすぐに諦めた。左手を右肩にかけ自らを抱きしめるようにして不安げに呟く。

「これ、なんなのかな。なんかの病気？　あたし、どうしちゃったんだろ」

瞳を潤ませた結美が啓孝を見上げた。
翼が生える病気なんて聞いたこともない。だからと言ってこの状況を説明できるはずもなく。啓孝は困惑の二文字を顔に張りつかせた。
「ご心配には及びませんよ」
突然の第三者の声に、二人が部屋の入り口を同時に振り返る。
そこにいた人物を見るなり兄妹は揃って目を奪われた。
――その男は一言で言えば、きれいな顔をした男だった。すっきりした顎のラインや、涼やかな甘さを含んだアーモンド形の瞳、微笑を浮かべる薄い唇が女性的な印象を与える。しかし細身にも見える体は服の上からでもしっかりした骨格をしているのがわかった。裾の長い妙なデザインをした詰襟の服に身を包んだその男の後ろに、もうひとり。同じ形の色の違う服を着た男がいた。前の男より頭ひとつ分ほど背が高く、無骨で男らしいがよく見ればこちらも端整な顔立ちをしていることに気づく。無表情だが鋭く切れ上がった目に満ちる強かな眼光と、静かな佇まいはどこか野生の獣を思わせた。
さらにその肩越しには廊下に立つ両親の姿が見えた。休日だから父がこの時間に家にいることはおかしくない。だが口を一文字に引き結んだ父の顔はいつになく険しかった。何かを堪えるように母は口元を両手で隠し、その肩を父に支えられていた。単純にこの事態に驚いているという様子ではない。
「父さん、母さん……？」
状況が把握できず呆然としていると、男のひとりが妹のもとへ近づき片膝をついた。ベッドの下から稀に見る美形に見上げられ、結美は身を硬くした。
「恐れることはありません。その翼はあなたの生来のものなのですよ」
そう口にした瞬間、男の肩甲骨のあたりがきらきらと輝くのが見えた。そして瞬きをする間にそこに白い翼が出現した。結美と同じ天使の羽だ。

驚きすぎて声も出ない啓孝の脳裏を直感がかすめた。まさかと思い視線を走らせると、片割れの男と目が合った。男が軽く目を伏せると、こちらの心情を読み取ったかのように、その背にまたしても純白の大きな翼が現れた――。

【01】ある朝、天使が舞い降りて（後書き）

連載二作目。前作よりも少しはレベルアップしてるといいなぁ……。
月一か隔月で更新していく予定なので、最後まで読んでいただけたらすごく嬉しいです。

【02】妹の秘密

十数年前、啓孝は事故で命を落としかけたことがあった。
そのとき両親の前に二人の天使が舞い降りて、啓孝の命を救ってくれたのだという。幼いころ、啓孝はそんな話を幾度となく聞かされていた。

――その天使がいま、啓孝の目の前にいた。
一階の間取りを広く取っている対面式キッチンを備えたリビングダイニング。その中央に置かれたローテーブルを挟んで向かい側――ソファーに浅く腰掛けている髪も目も肌の色さえ薄い色彩で構成されたその男はフェノンと名乗った。歳は結美と同じだと聞いたが物腰が落ち着いているせいか、とても大人びて見える。話し方も丁寧な姿勢を崩さない。見目も麗しく、白い翼を背負う姿はまさに天使像そのものだ。
しかし彼は天の御使いなどではなかった。
「じゃあ、結美はあんたたちと同じ異世界人だっていうのか」
啓孝は隣に座っている結美を横目に見やった。結美は膝の上にのせた両手を握りしめて、さっきから一言も口をきかずにうつむいていた。なんとなく背中の翼も力なくうなだれているように見える。改めて見ても信じられない光景だった。
「驚かれるのも無理はないと思います。ですが、その翼がなによりの証拠。ユーミリシェリア様は間違いなく我々の世界でお生まれになった我らの同胞にして、希望の御子です」
ユーミリシェリア。それが結美が生まれたときに授かった真名だとフェノンは誇らしげに語った。
十数年前――瀕死の息子を抱えた両親の前に現れた天使は、ある契約を持ちかけた。一も二もなくそれを受け入れた両親が縋るよう

な思いで伸ばした両手に託されたのは、白くやわらかな布地に包まれた啓孝よりも小さな女の子だった。
息子の命を助ける代わりに、その子を守り育てること。
それが啓孝の両親が天使と交わした契約だった。その後、女の子は両親の娘として育てられ、十六年が経とうとしている。
「ユーミリシェリア様はまもなく生まれ持った本来のお姿を取り戻されます。翼が現れたのはその徴。そうなればすぐに我々とともに故郷へお帰りいただけるようになります」
「で？　おまえたちは結美を連れていってどうするつもりなんだ？　ここには家族も友達もいるんだぞ。たったひとりで見知らぬところに連れて行かれて、結美が喜ぶとでも思ってるのか」
異世界人だと言われようが血の繋がりがなかろうが、物心のついたときから結美は啓孝の妹だ。いきなり家族を引き渡せと言われて簡単に承諾できるわけがない。啓孝はフェノンに向き直り挑むような目で言った。
しかしフェノンは啓孝の厳しい視線にも怯まなかった。
「さきほど申し上げたとおり、ユーミリシェリア様は生れ落ちた瞬間に、我々の世界で百年続く争いに終止符をうつと予言を受けた選ばれたお方です。ユーミリシェリア様が故郷に帰られることはいわば必然。この世界でお育ちになられたのは、成人まで健やかに過ごしていただくためです。この家に預けられたのは単なる偶然にすぎません」
「ずいぶんな言いようだな。先に結美を手放したのはそっちだろ。そんなに大事なら、なんでおまえたちが守ってやらなかったんだよ。いまさら現れて返せっていうのは都合良すぎるんじゃないか」
「――っ」
苛立ちを含んだ啓孝の言葉に、落ち着き払っていたフェノンの顔が初めて崩れた。嫌なところを突かれたのか下唇を噛んでわずかに顎をひく。
「それは……仕方がなかったのです。当時の戦況はとても危うく抜

き差しならぬ状態で、ユーミリシェリア様をお守りすることができなかったのです。ですが、できるのならこの手でユーミリシェリア様をお守りしたいと誰もが思っていたはずです。いえ、思っていました。別の世界に御身を隠すことは苦渋の、」

「あたし、そんなの知らない」

フェノンを遮った低い呟きは啓孝のすぐ隣から聞こえた。俯けていた顔を上げて結美はフェノンをぎっと睨んだ。

「ユーミリシェリア様――」

「あたしの名前は結美だもん。そんなユーミなんとかなんて名前じゃない」

やっと反応を示した結美にフェノンが一瞬の緩みを見せた。しかし結美の否定の言葉を聞いてすぐに表情を改めた。

「いいえ。あなたはユーミシェリア様です。俺とセオはあなたのことをずっと前から知っています。だから俺たちが迎えに来たんです。多くの仲間があなたの帰りを待っています。ともに故郷へ帰りましょう」

ユーミリシェリア様、と名前を呼ぶフェノンの声は啓孝と話しているときよりも、ずっと親愛に満ちていた。見つめる眼差しは真摯で甘い。騎士が主にそうするように、いまにも片膝をついて手を差し延べそうな雰囲気だ。

だが結美はそれを真っ向から拒絶した。多分に幼さの残る丸顔を精いっぱい歪ませて、

「やだっ！　帰りたいなら勝手に帰ればいいじゃん。ていうか、はやく帰ってよ！　あたしはあんたたちの言うことなんて信じない。一緒になんて絶対、ぜっったい行かないからね！」

勢いよく立ち上がると結美はそのまま部屋を飛び出した。足音だけがバタバタと階段を駆け上がり、やがて二階の部屋のドアが力任せに閉められた。

【02】妹の秘密（後書き）

短くてすいません……；

【03】兄の決心

誰もが口を噤み、沈黙がリビングに横たわった。
しばらく結美の出ていった方を見つめていたフェノンは小さく息をついて席を立った。
「諦めたほうがいいんじゃないか？　ああ見えて頑固だからな、一度癇癪を起こした結美は何を言っても聞かないぞ」
「勘違いしないでください。諦めるなどという選択肢は初めからありません」
リビングを出て行こうとしていたフェノンは、肩越しに啓孝を振り返った。その視線がちらりと４人がけの食卓に座る啓孝の両親に移る。
「目的を果たすまで我々はこちらに滞在させていただきます。そちらのお二人からは、すでに承諾を得ていますので」
「はぁ？」
「ユーミリシェリア様には何度でも話をします。わかっていただけるまで」
にっこりと微笑んで言ったあと、フェノンは一瞬で表情を消した。
「……ユーミリシェリア様にはできるだけご納得された上で、お戻りになってほしいと思っています。ですが、どうしてもそれが儘ならないというのであれば、無理にでもお帰りいただきます」
「あ、おい！」
二度目の制止は届かなかった。フェノンは振り返ることなく今度こそリビングから姿を消した。
啓孝は短く嘆息してソファーから腰を上げた。
「……あいつ、綺麗な顔してるくせに意外と頑固そうだよな」
誰にでもなく呟いて縁なしの眼鏡を片手で押し上げる。それから啓孝はずっと気になっていたことを口にした。

「で、父さんたちはなんでさっきからずっと黙ってるの？」
食卓に肘をついて額を覆ったまま微動だにしない父。向かい合わせに座っている母は、もともと細い肩をさらに小さくして声をかけるのも躊躇われるほど悄然としていた。
啓孝と結美がフェノンから話を聞いているときも、両親は一言も口を挟まなかった。それどころか今朝から一度も目を合わそうとしない。まるで何かから目を逸らそうとしているかのように。
啓孝の胸にじわりと嫌な熱がこもった。
「さっきの、あいつが言ってた承諾ってどういうこと？　まさか結美を異世界とやらに連れて行くことを許したわけじゃないよね」
啓孝は否定の言葉を待った。だが父は貝のように口を噤んだ。沈黙は肯定。理由はわからないが、両親は結美を引き渡すことを同意している。理解したとたん、頬に熱が集中するのがわかった。後頭部がじんと痺れる。
「なんだよそれ……。返せって言われて、そんなあっさり受け入れるの？　結美は家族なんじゃないのかよ。それとも父さんたちはそう思ってなかったってわけ？」
「――それは違うっ」
戸惑いと失望が入り混じった低い呟きに、父は弾かれるように顔を上げた。啓孝と向き合い、苦しげに顔を歪める。
「俺たちは家族だ。血の繋がりがあろうとなかろうと関係ない。啓孝も結美も父さんと母さんの子だよ。むしろ血の繋がりがないなんて、今日まで忘れていたくらいなんだ……」
それだけは信じてほしいと、父は語尾を震わせた。
「だったら！　二人ともなんでそんな顔してるんだよ！」
苛立ちを含んだ啓孝の声に視界の端で母の肩がびくりと震えた。伏せた顔にいつもの穏やかで明るい笑顔は見られない。父と同じようにこの世の終わりのような顔をしている。
「家族だって言うならそんなふうに黙ってないで、いますぐあいつを追い出せばいいじゃないか」

何もおかしなことは言っていない。おかしいのは突然やってきて結美を引き渡せなどというフェノンと、それになんの抵抗もみせない両親の方だ。
「あんな勝手な話に大人しく従おうなんてどうかしてるっ」
「――他人の娘と実の息子の命。秤にかけるまでもないことだろう」
なおも父親に詰め寄ろうとした啓孝を止めたのは、馴染みのない低音だった。
初めて聞いた男の声に驚いて啓孝は目を瞠った。彼の存在をまったく忘れていたのだ。
暗色の服に身を包んだ長身。猫科の獣を思わせるしなやかな体躯。一歩外に出れば誰もが振り返りそうな容貌をもちながら、彼は不思議なほど気配を感じさせなかった。男の名はセオ。フェノンと同じ異世界人だが、いまの彼に翼はない。どうやらあれは自分たちの意思で出し入れができる代物らしい。結美の部屋からリビングに移動している間になくなっていた。
両腕を組み壁に軽く背中を預けたセオは、無造作に伸びた髪の奥から啓孝を見据えた。フェノンとは違う鋭い眼光に啓孝は思わず怯んだ。
「……僕の命って、どういう意味だ」
「もともとおまえの命を救うために彼らがした契約は、予言の御子の成人までの養育だ。最初からそれ以上は科していないし、こちらもそれを望んでいない。たとえ他人であれ、長く時を共にすれば情がうつることは想定済みだ。だが彼女の引渡しを拒否するのなら契約は破棄される」
「破棄……？」
セオの眼差しが剣呑な色を伴いわずかに細められた。
「おまえの命はなかったことになる、ということだ」
「な――、はぁ！？」
予期せぬ言葉に啓孝はあっけにとられた。これは紛れもなく脅しだ。言うことをきかないなら命を奪うと、彼はそう言っている。し

かしセオの淡々とした口調と感情の見えない表情のせいか、自分の身が危機に直面しているという実感は少しもわかない。だから恐れよりも単純に怒りのほうが勝った。
「血を分けた息子の命を諦める覚悟があるのなら、我らも手を引こう。しかし彼らはそれが利口な選択でないことをよくわかっている」
「そう言って、父さんたちを黙らせたのか。卑怯だろ、そんなの！」
「どう受け取られようとかまわない。それが私たちに任された仕事だ」
「何が仕事だよっ。結美はまだ十六にもなってないんだぞ。成人までって約束なら話が違うじゃないか」
食って掛かる勢いの啓孝。
セオは組んでいた腕を下ろし壁から背を離して、まっすぐ啓孝と対面した。
「我らには生まれながらに備わった固有の能力がある。その力が目覚めれば子供は成人として認められる。時期はそれぞれに差異があるが、早ければ生まれて十五年で成人するものもいる。翼が現れるのは覚醒の兆しだ。力に目覚めれば予言の御子に施されている術が解かれ、外見も本来の姿に戻る。嫌でもこちらの人間との違いを目の当たりにするだろう」
「……っ」
セオの声には一切の感情が挟まれていなかった。揺らぎのない蒼い湖面を思わせる深く澄んだ声音。小一時間も聞かされていたら、どんな理不尽なことも説得されてしまいそうな不思議な響きを持っていた。父親とも教師や塾の講師とも違う。それは啓孝が初めて聞く種類の声だった。
啓孝は握った拳に力を込めた。そうしなければセオの威光に負けてしまいそうだった。
「――だからって人の命を盾にとるようなやつらに、結美を渡せるわけないだろっ」
「では、どうする」

「契約したのは父さんと母さんであって、僕はその対象だっただけだ。逆らったって契約違反にはならないよな。だから、結美は僕が守る。おまえたちの思い通りには絶対させない」
つかの間、啓孝とセオの視線が絡み合う。
「……好きにするといい」
興味を失ったかのように、先にふと目を逸らせたのはセオの方だった。その眉間に某かの感情が表れていたことに、啓孝が気づくことはなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2398v/

ある朝、天使が舞い降りて

2011年10月1日03時14分発行